

美術教育の今―存在を確かめ合える美術教育

伊藤 記子

◇ 社会・文化の流れの中で

美術教育の現場では、かつて、「生活を描けない子どもたち」ということが問題視されたことがありました。核家族化が進み、デジタルゲームの出現がそれを引き起こしたと分析することも多かったのです。「夏休みの思い出」を描いても、居間にたった一人でゲームをする姿の場面が出現しました。それは、子どもの遊びや過ごし方が大きく変わりつつある時でした。指導に当たる私たちの多くは、描かせるための指導をマニュアル化したものに迎合しました。そうすると、作品の展示では、まるで金太郎あめのように同じような作品が並びました。

鉛筆をナイフで削れない子どもが増え、新聞やチラシ・砂泥で遊んだ経験が減ったとされると、「造形あそび」という分野が作られ、図工の時間はひたすら遊ばされる子どもの姿がありました。教育者の中には、その状況が「どの子どもも生き生き学習している素晴らしい授業」という人間もいま

す。実は、子どもの本質は何も変わっていないのです。時間があつて物がなければ、彼らは工夫して「遊び」を生み出すのです。私たち大人がそうであったように。このように、学習のねらいのもと、体験を促され遊ぶための指導を受けている中でいったい何が育つのでしょうか。どんな題材で表現しても、現在の学校教育の多くのシーンで「個」が埋没していることが残念で仕方ありません。

子どもたちの日常も教職員以上に忙しいものになっています。友だちと遊ぶ時間はほとんどなく、帰宅時間を過ぎてからデジタル化されたバーチャルな世界でのやり取りに終始してしまいます。そんな状況で、美術教育で何ができるのかということとを課題にして現在に至ります。

◇ 思いを大切にする美術教育

愛着のある物に命が宿ると言われますが、表現されたものには制作者自身の思いが宿ります。子どもたちの素晴らしいところは、作品を作りなが

ら自分自身を投影させ伝えようとするところです。いつも、作品を通して自分のことを語ってくれるのです。

年度の変わり目に転校してきたAさんは、方言の違いもあり、集団になかなか馴染めずにいました。美術の時間に「わたしのいる情景」というテーマで絵画表現にとりくみました。ペランダの手すりに手をかけて景色を見るAさんが描かれていました。山並みや行き交う車や電車、連なる住宅の屋根。本当に克明に描かれていました。みんなが記憶だけで描かれた作品を口々に賞賛しました。

その作品を前にしてAさんが私に語ってくれたのは、描いたのは引越す前日に見た家からの景色で、いつも思い出すということと、転校したくなかったということでした。了承を得て校内掲示しましたが、参観日に来校したAさんの保護者の方が、涙を流して観ていました。おうちの都合で転校したAさんは、転校以来無口になってしまったそうです。思っていた以上に、おうちの方を支えて強く振舞っていたことを感じ取ったそうです。

子どもはプロの芸術家ではありません。作品を受け取る時、作品を通して子どもの存在を感じ取っていただいたいと思います。技術的に「うまいへた。」だけで判断しないでほしいのです。この大人社会の価値観が子どもの表現を台無しにしていく場面を数え切れぬほど目にしてきました。それこそ能力主義そのものです。「美術教育は究極のインクルーシブ教育である」という方もいます。

図工・美術とは、答えもないし、向かう道も自分で考えていく教科なのです。真剣な表現であれば大きな価値があるものなのです。

◇ 現場に押し寄せる波

子どもたちが作品制作にこだわりを持つほど、様々な表現技法の追求などが始まります。だからこそ、美術教育の研究では研鑽も熱心に重ねてきました。

しかし、教育全体が「学力向上」に傾き、知識・理解で学力を測れる教科が重要とされると、技能教科は軽視され始めました。美術科の指導時数は週一時間程度になっていました。国語・数学・理科・社会・英語は免許所有者でなくてはならず、それ以外の美術科は免許を持っていなくても指導可能とされると、各学校は授業時数の多い五教科の教職員を優先して配置するようになりました。

授業時数が減ると、根気を要するような時間のかかる題材は敬遠され、単発の題材が増えました。美術科を免許外で担当する教職員は教材研究や準備の時間を確保できず、お手軽な題材を取り入れ始めました。免許を持っている教職員は特別支援学級を掛け持ちするなど、美術科をメインにとりくむことが難しくなりました。そして、四年前から、拠点校方式という巡回美術教諭のしくみが導入されると、何校も一人で指導することも当たり前のようになってきました。

美術教育は人間形成や集団作りの側面も持っています。子どもをそれぞれの生活と結び付けたり、手仕事で生活者としての価値を見出したり、周囲や事象と結び付けたりすることもあります。授業の一コマだけの関わりで完結することもできませんが、私たちが課題としていることは日々の関わりがあつてこそできることなのです。それでも、美術科免許所有者が全くいない市町も多く、脈々ととりくんできた教科研究のための部会も成り立たなくなつてきている現状があります。

また、次期学習指導要領では、「アクティブラーニング」などにより、「学び方」まで方向付けるものが導入されようとしています。そして、子どもが体験したことから習得したことを「知識」とするそうです。きっとその内容も評価の対象となるでしょう。現存する「格差社会」はどう影響するのでしょうか。生い立ちや生活の実態による事象を知識とすることには不安を感じます。

この北海道では、戦前、生活図画教育事件が起きています。ここでは詳細には触れませんが、子どもがどんなことを思い描いたのかを問い、指導したとされる教職員が弾圧され命を落としています。

◇ 存在を確かめ合える美術教育に

素晴らしい表現を目の当たりにすると言葉が出てこないことはありませんか。現在、学校現場で

は、「言語活動によるコミュニケーション能力の育成」が目されています。周囲が分かりやすい文章表記された理詰めの力が、繊細で柔らかな感受性よりも上位とされています。それは評価する側からみると当然のことかもしれません。そう思いながらも、乱暴なこと極まりなくも感じていきます。

子どもたちが自由に表現し、そこから思想や価値観を周囲に受けとめられることは、美術教育では大変重要なことです。次期学習指導要領の重点ともされている「資質向上」は、子どもを社会の「部品」としか捉えていないように感じます。ありのままの存在を確かめていけるような美術教育をめざしていきたいと思えます。

伊藤記子（いとう のりこ）

公立中学校に勤めている。美術科巡回教諭として一市内三校の美術科授業を担当している。合同教育研究全道集会美術教育分科会共同研究者及び教科研究委員。子どもに寄り添い、一人一人に響き合う人間形成としての美術教育をめざして活動している。